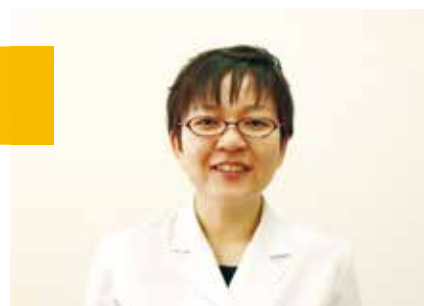


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第20回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



初めてお宅に訪問したとき、その人はさくらんぼを食べていた。さくらんぼの種を、お皿の脇に1列に並べて置いていた。私はそれを見て、なんだか彼女のことが好きになってしまった。

彼女とかかわるようになったきっかけは、ケアマネジャーさんからの依頼だった。ひとり暮らしのおばあさんで、腎機能低下あり。ヘルパーさんを利用して在宅療養をしていたが、認知機能低下が見られ、大事な薬がきちんと服用できず、ここ最近、入退院を繰り返している。今回の退院を機に、訪問薬剤管理指導を頼みたい。遠方の息子さんも了解している。現在、有料老人ホーム入所待ちの段階。入所が決定するまでの間、在宅療養支援を手伝ってくれないか——という経緯だ。

*

介護保険による訪問介護などのサービス利用にあたっては、要介護認定を市区町村へ申請し、認定された介護度によって利用限度額が決められる。それを受け、ケアマネさんが、利用限度額と必要なサービスをマッチングさせる。認知症という疾患では、遂行機能障害、記憶障害で介護度が測られるが、身体機能の低下がない場合、えてして高い介護度とはならない。結果、身体機能が保たれている一方で、社会生活が難しくなる認知症の初期から中期の段階で、介護サービスが十分に受けられないケースは多い。

“さくらんぼの君”も、週8回(週3日間)、朝夕の食事介助、服薬介助でヘルパーさんを入れるのが限度額ぎりぎりのところだった。このため、週末は遠方の息子さん、もう1日をケアマネさん、さらにもう1日を薬局で分担し、毎日、誰かが彼女の状態を確認できる体制にし

て在宅療養が始まった。地域との絆は薄く、公的サービスのみが命綱だった。

*

彼女は、品の良いご婦人だった。週に1回しか訪問しない私を、おそらく覚えてくれてはいなかったと思う。口癖のように、「頭が悪くなってしまったの。ごめんなさいね」とおっしゃった。

多くの認知症の患者さんに見られるように、彼女は、物事を覚えていない事実を周囲に悟らせないように対応された。いつ行ってもテレビがついており、内容について聞くと「流しているだけで見ていないの」と答えられる。どんな番組が好きか尋ね、新聞のテレビ欄と照らし合わせて「〇時から〇チャンネルで〇〇がありますよ」と伝えてみた。彼女の返事は、「ありがとう。でも、ごめんなさい。テレビの操作法がわからないの」だった。

食後の服薬確認のため、朝食時にはいっしょに台所のテーブルにつき、お茶を入れ、彼女の食事を見守った。庭の木を眺めながら娘時代の話をしてくれる彼女は、美しくチャーミングだった。亡くなったご主人との思い出の庭木や食器の一つひとつに、家族の歴史がある。「本当はずっと家にいたいんだけど、頭がばかになってしまったから……」。そんな様子を見て、日常の中で、喪失を実感しながらも淡々と生活するのはどんな心持ちだろうか、思いをめぐらせた。

その後、ご家族の意向どおり、空きが出たタイミングで彼女は施設に入所し、そこで私とのかかわりは途切れた。しかし、今でも、ときどき1列に並んださくらんぼの種を思い出す。そして、自分は、彼女に対して何か仕事ができただろうかと自問する。